

解答

□一

問一

(a) 案内 (b) 供(え) (c) 制(し) (d) 古傷

問二

I 自分は赦されるのだという思いが、現実のものとして感じられてきた。

II 今朝の新聞記事が祐介の墓に供えられているということは、祐介の夢を背負って早稲田大学で野球をする隼人のことを祐介の母親が祐介に報告したということであり、祐介の母親が隼人のことを認め、気づかっているということだから。

問三

I 亡くなった祐介の夢をかなえるために野球を続け、早稲田大学の野球部で活躍してきたが、野球を心から楽しむことはできないでいる。

II 四年間、都

問四

今まで背負っていた重しや苦しみから解放され、自分の野球を心から楽しもうと、久しぶりに野球だけに集中

できている時間を邪魔されたくない。

問六

オ

問七

イ

問八

ウ

□三

問一

何百年何千年と存在し、さまざまに人々に使われ続け、熟成した佇まいを放つ建築。

問二

時間と歴史に対する誠意

問三

アルハンブラ宮殿には脈々と流れる時間のもつ魅力があり、それに子供たちが触れて豊かな想像力を発揮する体験ができるので、テーマパークのようだと考えたから。

この門をくぐり抜けたであろう古の人たち

問四

建物を支える力の動き

問五

エ

問六

イ

問七

イ

解説

□一

問二

祐介が亡くなったのは自分のせいだと感じてきた隼人は、祐介の夢をかなえようと野球を続けてきたが、祐介の母親が新聞記事の中で、隼人に対して「何かを背負わせてしまった」と隼人を気づかう発言をしていたことを知り、自分の存在を認められたような、赦されたような気持ちになったと読み取ることができます。

問五

祐介の墓で「泣くだけ泣いて」マネージャーの庄司に「思いの丈をぶちまけて」、隼人は「一心不乱にミット目がけて投げる」ことが、この上なく楽しく感じられ、「この瞬間だけに集中していられる」感覚を久しぶりに味わっています。そんな「せっかくの神聖な気持ち」を汚されたような気がして」と描写されています。

□二

問三

「脈々と流れる時間をもつ魅力をイノセントな子供たちが体験したら、どれだけ豊かな想像力を発揮することだろうか」、アルハンブラ宮殿を「歴史のテーマパークじゃないかと感じた」と述べられている部分に着目しましょう。